

図書館だより

'75・6

発刊のこ と ば

図書館長 伊 藤 政 雄

この度本学で初めて「図書館だより」を出すことになった。勿論今までも「図書館利用のしおり」とか「新刊書紹介」などを出して図書館利用の便を計って来たが、学生と図書館との関係をより一層密にし、より多く図書館を利用してもらう目的で、広報的な色々な図書館の紹介ばかりでなく、新刊書の書評とか、先生方や学生の文も載せて楽しい内容の「図書館だより」を出すことになったのである。

言うまでもなく大学における図書館の果たす役割は極めて大きく、大学設置基準の中で、立派な教授陣と、学生を収容するための校舎や施設と相俟って、定められた書籍数を含んだ図書館の設備が絶対的必要条件として要求されている。この点本学の図書館は蔵書数約八万冊、書庫の床面積540㎡、閲覧室の床面積1,082㎡、事務室その他が270㎡、それに図書館附属のゼミ室が3室と外に視聴覚設備もあり、館員も館長以下15名おって図書館業務に従事しており、本学程度の規模の大学としては満足すべき程度のものであると思う。

さて東大総長であった矢内原忠雄氏は読書について、「学問に従事し、教養を修める方法のうち、重要なものの一つは読書である。読書が唯一の方法ではないけれども、読書を離れて学問と教養のありえないことは事実である。それ

は書物は人が思想を伝え、知識を交換するためにつくり出した重要な発明だからである」と、言っておられる。この様に重要な読書を学問を専業とする学生が、図書館を利用して行うのは当然であり、一般教養及び専門の図書がどっさりあって、必要に応じて長期貸出にも応じてくれるので、卒論や各種レポートの作成には図書館は欠くことのできないものである。従って大学における学問・研究の大半は図書館を利用することによって果せると言っても過言ではないので、放課後ばかりでなく、いわゆる空き時間を利用して図書館で勉強されることを極力お勧めする。

この「図書館だより」は今年は取敢えず年二回発行する予定であるが、将来はできれば年三回出したいと望んでいる。図書館は本誌を通じて学生の皆さんと一層連絡を密にし、館の実体を認識してもらい、皆さんが一層館に親しみ、利用して下さることをお待ちしている。館員も一同一致協力して皆さんの勉学に役立つよう最大の努力を払う考えである。

最後に日常業務の多忙な中で、本誌の編集に従事して下さった館員の方々や、色々指導助言をして下さった先生方に深く感謝申し上げます。

図書館だよりの創刊によせて

学長 山下 二枝

この度「図書館だより」が創刊されます事は、大変うれしく心から喜んで居ります。図書館は、大学の生命線であり、これを強化し、充実することは、先生方の研究、学生の方々の勉学の為に、不可欠な条件であり、広くは社会への貢献につながる事でもあります。この事を心にかけてられた牧野名誉学長は、立派な図書館を建築され、代々の図書館長はじめ職員の方々は、教授、学生の方々の利用活用の為に、献身的な努力を重ね、現在みるような非常に恵まれた図書館が出来上がりました。広くて整備された閲覧室、開架図書や蔵書の種類冊数等々・・・細かい点にいたるまで、暖かい心遣いが払われて

居ります。図書館の職員はこのよき英知の集積とその機能を、「図書館だより」を通して学生の方々に認識して頂き、よりよき活用を期待して居ります。

学生の方々は館員の方々の心を汲んで、豊かな資料を大いに利用し、知識の向上に励んで下さい。デカルトは「私の本は少くとも四度読むように」と云って居りますし、「読書百遍意おのずから通ず」というように、難かしいからといって、あっさり諦める事なく、目的に照して、図書館資料の選択に十分意を用い、忍耐強く読解を重ね、研究目的の達成を期していただきたいと思います。

図書館あれこれ

かの有名なクレオパトラが、時の英雄、アントニーから、図書館を贈られたことをご存じですか。こんな記録も、図書館史にはあります。絶世の美女と図書館——という結びつきを発見して、ライブラリアンは、たのしがります。

さて、図書館の起こりは、今のところ、3000年の昔、とされております。古代のバビルス、粘土板、羊皮紙の文書や、くさりのついた書物の絵を見たことがおありでしょうか。大昔の図書館におさめられていた資料は、このようなものでした。日本では、聖徳太子の夢殿が、個人文庫としては、最古のものと推測されています。実質的な図書館の形態と機能を備えてきたのは、8世紀初頭の図書寮以降のことと見られます。詩人の石上宅嗣(729~781)の芸亭は、日本公共図書館の始まりであり、天理大学の近くには、「芸亭跡」の碑が、現在みられます。平安時代の、和氣家の弘文院、菅原道真の紅梅殿も有名です。中世になると、大名達は皆、その子弟の教養のために、自分達の施設を持って

いました。金沢文庫、足利学校などの名を耳にされたことがあるでしょう。17世紀初め、徳川家康が、江戸城内に造った、富士見御宝蔵からはじまった紅葉山文庫は、江戸随一のスケールのものでしたが、これは現在、国会図書館におさめられています。しかし、以上どの図書館にあっても、その利用者たちは、もちろん限られていたのです。書籍館——この一般公開の図書館が、文部省の手によって、ようやく開かれたのは、明治5年のことです。その後は、あちらこちら、どんどんと図書館は増加していきませんが、1941年、第二次大戦がはじまり、終戦まぎわには、大方休館状態でした。

敗戦により、図書館界は大きく転換し、1948年、近代図書館の性格をもつ国立国会図書館が誕生し、図書館法もできました。それまでの教育法規は、すべて改廃され、新制大学は、その教育目的を遂行するために、付属図書館を整備する必要に迫られました。藤女子大学の図書館も、この趣旨にそって設けられました。ここ

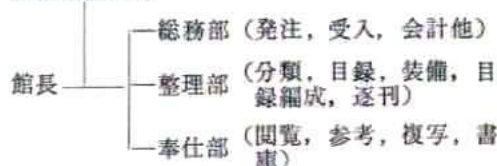
で、この私たちの藤女子大学図書館の誕生当時のことに、触れておきたいと思います。

昭和36年、藤女子短期大学図書館は、「藤女子大学図書館」として生まれかわりました。約4万冊の蔵書は、これまでの蔵書と、あらたに諸先生の周到な選択によって購入された図書と、そしてこれに、大学の内外、海外よりの好意あふれる寄贈書とをさらに加えて成ったものでした。館長は、初代山北タツエ先生、ついで奥山ワカ子、奥田三郎、藤村潔の諸先生を経て、現在は五代目、伊藤政雄先生です。旧短大校舎の3階の教室を図書館と称していた頃は、廊下に新聞をよむ座席があり、資料整理の事務室はせまいので、体を横にして歩いたものでした。閲覧室は二ヶ所に分かれていて、開架の図書は、参考図書と、あとはごくかぎられた本だけで、ほとんどは、書庫から係が出納しました。そのような不自由さの中でも、図書館はよく利用され、他大学では考えられないほどの高い利用率でした。——統計表参照——館員の仕事は、総務、整理、閲覧と、基本的には分担がきまっていたましたが、全職員がゆうずうをつけあい、交替で閲覧業務をも行ないました。やがて、教室がたりなくなり、図書館も、このままでは困るというので、山北館長先生を中心に、館員達も希望や構想を練り、北岡建築主任が他大学の図書館を見学し、予算と見合わせながら上下の総意をまとめられました。鉄筋コンクリートの現図書館が完成されたのは、昭和42年12月のことでした。備品のサイズ、色彩、配置などには、館員達のアイディアが生かされました。キャレルやゼミ室の机に、ちょっと妙なところがあるのにお気づきでしょうか。それは、閲覧室の大机の鏡板の残りを利用したためなのです。年が明けて、43年3月、いよいよ移転。当時の学生の皆さんが、図書運びを手伝われました。あの旧校舎の3階から、この新しい書庫まで、紐でしばった図書の包みを捧げもった学生の行列が、延々とつづきました。大学中からまちうけられた開館は5月20日でした。旧館の

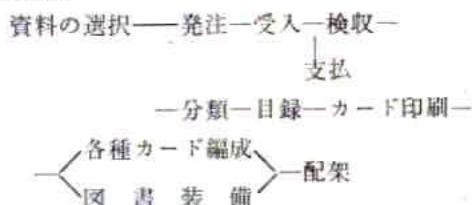
ころと比べて、館のスペースとともに、仕事の内容もふくらんだ現在は、かつて4人であった館員も10人をこえるようになりました。そして作業も分課ということが可能になったわけですが、利用者の皆さんと、ほとんど接することのない係も出てきました。皆さんのなかには、図書館といえば、閲覧室だけ、館員は閲覧室にいる者だけと思っている方はいませんか。閲覧、参考部門は、いわば図書館の表口で、裏方には、総務、整理部門があります。図書館の現在の組織、仕事の流れについても少しおしらせしましょう。

組織

図書館委員会



作業の流れ



業務の内容は大体付記したようなもので、それぞれ分担がきまっています。しかし、図書館の仕事はすべて、利用者に資料を提供することにありますから、各部は一つの奉仕体としてまとまっていなければならないことにもなります。毎週一回の、スタッフ・ミーティングは、全員が集まって連絡しあい、検討しあい、意見をまぜあう大切な協力場となっています。

図書館の利用法、資料のさがし方などのくわしいことは、お手もとの「図書館利用案内」でよまれることと思いますのではぶきますが、今年、試験的に編成した「分類目録のための件名索引」につき少しふれます。図書を分類目録によって、主題から、見出だそうとして、分類の番号と主題の言葉が結びつけられないときは、

係にきかれるのが、手とりばやくはありますが、一応利用者自身でもさがせる手がかりにもと作られたのがこの索引です。

例 感覚

(心理学) →141.2

(動物学) →481

(生理学) →491.3

映画 →778

(学 習) →375.2

(社会教育) →379.7

まだ始めたばかりで、内容も少なく、これから充実させていくはずのもので、どうぞ利用して、ご意見などお寄せ下さい。奉仕係を通して伝えられる皆さんの声は、整理その他の係の今後の作業に欠くことの出来ない示唆として尊重されるのですから。この「索引」は、ただ一例にすぎませんが、利用者、奉仕係、整理係などが一つに心をよせ合って、図書館の活動はのびていくものと思います。

図書館にもっと充分に本があって、利用者の必要とする資料を完全に提供できたらと誰もが希っていますが、情報量の急増、学術研究の拡大と細分化、隣接分野の多面的利用などと、到底一館だけでは、さばくことができない社会情勢になりました。これをのりきるために、図書館は互に協力しようという声があがりました。自館にないもので、必要なものは他から借り、逆に、他館の必要とするものがこちらにあれば提供します。図書の購入についても、分野をきめて分担しあうとか、有無相通じる交換を行なうなど、その協力の内容と規模は違っていて

も、何らかの形で実施されています。私たちの図書館も、多方面からたすけられもし、また微力ですが、こちらもお貸ししています。館種をとわず、国境、民族、階級をこえて国際的なこの協力は図書館にふさわしいものといえましょう。本来、図書館の扱う知識や情報は、無差別で普遍のものなのですから。

活版印刷術の発明から500年余り経た現在、電力化された機械による出版、電子的手段で貯えられた情報など恩恵あふれる20世紀です。こちらのぞみさえすれば、最新の知識も、遠い異国の情報も、図書館というタイムトンネルを通して獲得出来るのです。一方に、恐怖、絶望、孤独、相互不信から逃れられない不安と危機感の現代でもあることは否定できませんが、この図書館の相互のたすけあいが、利用者のためにと呼びあわれる善意が実存していることを思い、また私たちの図書館もこれに共鳴していると考えますと、一すじ光のさしてくるのを感じます。本当の美しい正しい世界をひらく若いみなさんに、この図書館が欠くことの出来ない大切な存在であり得ますよう館員一同一層の努力をしたいと思っております。

「20世紀の図書館の役割りは、過去の遺産を保存するというもののほかに、国際間の理解を深め、世界の平和と親善を促すものでなければならぬ。」という、E.D.ジョンソンの見解を心に留めましょう。あのアレクサンドリア図書館集書狂のプトレミー王の観念は、遠い未開時代の幻影で、現代には通用しない、また許されないこととなりました。

蔵書資料の現況

	和 書	洋 書	合 計	工 学	2,378	146	2,524
総 記	5,569	1,578	7,147	産 業	2,378	33	289
哲 学	4,474	1,239	5,713	芸 術	4,062	596	4,658
歴 史	5,437	820	6,257	語 学	2,734	2,143	4,877
社会科学	7,135	514	7,649	文 学	22,602	10,669	33,271
自然科学	4,839	572	5,411	計	59,486	18,310	77,796

辞典の書架から

参 考 係

閲覧室の一部「参考図書」と見出しのついた書架に一群の図書があります。調査資料としての機能を持った各種の本が並んでいますが、その中で一番数の多いものが辞典、事典です。御存知の通り、主にことがらを調べる事典、ことばの意味を解く辞典、何でも並んでいる百科事典、それぞれに一般的なもの、専門的なものなど実に多様であります。例えば「古事類苑」(類書と呼ばれる)のように数十冊からなる官撰の一種の百科事典、たった2巻に70万語を扱った「大辞典」(縮刷版・平凡社)などを比較すると興味深いものがあります。

* * *

書店などで特殊事典と呼ばれている専門的主題を扱った事典があります。風俗、食物、書道、映画、演劇、服装、事物起源、美術など殆んど分野についてハンディなもの、数十巻に及ぶ和洋それぞれのものなどがあります。しかし同じ主題を扱っていても編集方針が異なる場合があるので、地名辞典(個有名詞としての発音だけのもの、地理学的なもの、歴史・文学等の出典記述を附したもの)神話辞典(伝説・比較神話学の立場、文学的なもの)などと称しても内容が全然違う場合があるのです。皆さんの勉強と強いつながりのある辞典、字典でも同じことが言えましょう。一口に国語辞典と称しても、百科事典的要素の強いもの(広辞林・広辞苑)出典・文例等に詳しい(大日本国語辞典)語源説明から語構成に異色ある(大言海)などや、類義語の区分を試みた(角川国語中辞典)小さい1冊に古語現代語、旧漢字当用漢字など十数万語を集成した(新潮国語辞典)などがあります。和英を例にとっても、大きいもの(新和英大辞典・研究社、見出し語8万合成語6万)僅か850語のBasic Englishで書かれたもの(英文を書くための辞書・北星堂)など

色々です。ジョンソン博士、グリム兄弟などの辞典は業績とともに著者の個性が強いことで有名ですが、日本でも諸橋轍次(大漢和)、大槻文彦(大言海)など個性のあふれた大きな辞典があります。英和も和英も編んだ齊藤秀三郎は、解釈や例文に川柳から都々逸まで用いて居ります。

このように特色、長所、短所がそれぞれ異って居り、見方によっては著名な辞典ほど、その表れが著しいと言えます。従って利用する目的次第で「辞源」の代り「辞海」でも役立つ、「大字典」の代りに「角川漢和辞典」を用いる訳にいかないと言うことになります。

同じ百科事典でも専門家に自由に執筆させているもの、編集部で穏当にまとめたもの、一つの項目の記事が新書版1冊の分量になる大項目事典や逆の小項目事典があります。従って辞典について多少の知識を持ち、上手に目的に適用を利用することで、読書の楽しみも学習の能率も変わって来ると思います。

* * *

先生方の中にも学生の百科事典利用を嫌う、或いはすすめる傾きがあります。前者は、基本的な理解や順序を踏んだ学習をせず、安直な姿勢で課題などにお茶をにごすことへの戒めでもあり、後者は専門的な事項や、主題に関連した分野へ出発する為の一般的な導入としての意味を認めてであります。何れにせよ百科事典には、その様に広い役割があります。

事典の実質的な利用に際して、索引法をよくマスターして無駄なく活用する、殊に相関事項をこぼさぬこと、出来れば2、3冊を併用することなど、自分の利用に適した手法を作ることが大切だと思います。ブリタニカや平凡社版にも間違った記述があり、間違いでなくとも他の事典との大きな相違が見られます。決して過信

することは出来ません。

* * *

図書館にはN・E・Dをはじめ、倭名抄、名義抄などの古辞書、うす汚れた小辞典ながら他の大きな辞典に見られぬ用語をもつ「カトリック用語小辞典」、百科事典の国フランスの辞典出版社ラルース版各種辞典（ラルース辞典の扉には、文例の無い辞典は単なる骸骨だ、と言う標語が必ず入っています）、一種の美術事典でありながら、文学作品の理解にも役立つ「キリスト教図像辞典」同じく「海事用語辞典」など

があります。時に目的もなく頁を繰って新発見をする楽しみ、あわただしく専門の事典を漁って歩く忙しさ……または参照の指示で頁を繰っても参照事項が無かったおかしさなど、辞典と過すひとときは、図書館だけの味わいと言えましょう。図書館の辞書類の構成は決して充分ではありませんが、毎年補充されていますから、調べたり読んだり利用して欲しいと思います。探している事典が見当たらない場合など、どうぞ出納台の係員にひとこと声をおかけ下さい。

書齋訪問

青木正次先生

青木先生は、横浜のお生まれで、東京教育大学の御出身である。卒論では、近松以前の金平浄瑠璃をとりあげられたそうである。子供の頃、よく芝居に連れて行ってもらったこ



となどから浄瑠璃に興味をもつようになったとおっしゃられた。卒論に際しては、テキストが活字になっていなかったため、図書館に通い、和本一冊を丸3日かかって書き写したとの苦労話をして下さい。

先生の書齋では、本ばかりでなく絵画やステレオ、フルート、オカリナ、ギターなどが目をひいた。ビートルズやロックの中で研究なさっている先生に、若さにあふれた親しみやすさを感じた。

読書は多読型ではなく、一行一行を熟考しながら時間をかけて読まれるそうである。普段は読書よりも生の人間の生き方から影響をお受けになるらしいが、学生時代に読まれた和辻哲郎の「日本芸術史研究」は強く影響された書であ

（日本文学・近世）

るという。いわゆる通よりも、この書にみられるような通ぶらない物の見方、考え方にひかれるとおっしゃられた。

作品の理解について、生活感覚の相違、作者の年令との差異などが問題になるというお考えである。その作者の年令に達する以外に理解の方法がない部分があるそうだ。

最近の資料の氾濫と安易な資料の大衆化には疑問を感じ、また学問についてもその結果が一般大衆のものになればよいのであって、全員が学者になる必要はないとお考えだ。

図書館に関しては、個々の図書館では最低限度の資料のみを揃え、資料センター設置を考えなければならない時期になっているとおっしゃられた。

現代の教師と学生は特別の間柄ではなくなっている——つまり学校が一つの特殊な社会ではなくなり、廊下が外の道路の延長ではないかとはユニークな発想と見受けられた。義理、人情、法律などの枠が取り払われると、かえって利害をはなれてただの人間同士で、共通の世界をつくりやすいのではないかという意識をおもちのようである。

死ぬまでつづ走れる限り走り通すことが、一般的人間の宿命であるなら、そう生きることが正直な生き方であるだろうとおっしゃられた。

矢野雋輔先生

(自然科学)

二階にある研究室は、先生の『お城』と呼ぶにふさわしい。そこは、様々な機械装置や一本のネジも造り出すという工場などでひしめき合っている。そんな中で、この城の主は、日夜、研究を進めておられる。



ある春の日の午後、お忙しい中をお邪魔し先生のお話を聞かせていただいた。

お生れは、九州・福岡。小さい頃から昆虫に興味を持ち、中学時代に台湾へ蝶を採りにでかけて、新高山の頂上で北大生と出会ったことが、後に単身北海道へやって来るきっかけとなる。北大、理学部、動物学科を卒業。卒論のテーマは、『海産無脊椎動物の実験発生』。先生の学生時代は、もっぱら、山に登ること、動物を見ることで、言い換えれば、非生産的な暮らしをしてこられたという。先生のお話によるなら、「学校とは、最終目的として何かを生み出すのではなく、学校へ行っているという事実の方が、はるかに重要であるということ。また、人生の中で役に立たない事のできる時こそが一番価値のある時であり、さらに、社会がどんなに厳しくなろうと学生達には、その様な発想があってもいいと思うし、時に、価値の転換を試みることも大切」ということのようにであった。

さて、目下、先生の一番の興味の対象は、「客観的認識とは、どういうことか？」であり

それを知ろうとする時、むしろ、自然科学的でないものを徹底的に知らなければならないと力説される。従って読書についても、自然科学の範囲などということにとらわれず、例えば、「中世の魔女という概念が、近代科学にどのような形で置き換えられているか」等、あらゆる分野の本を読んでおられるのである。

最後に、図書館に関しては、「単行本だけでなく、もっと読書新聞の類も整備してはどうか」さらに、図書館全体については、「もっとなごやかさ、暖かきみいたなもの（本屋の店頭でマンガ本を立ち読みするような）をつくり出していったいいのではないかな？ つまり、静けさが、冷やかさ、張り詰めた雰囲気につながるのではなく、そこに心の安らぎみいたなものがプラスされて、授業を離れた学生達を包んで欲しい」と指摘された。

先生のお話をお聞きしているうちに、改めて図書館員が努力しなければならないいくつかのことを、しみじみ考えさせられたことであった。

入館者と貸出冊数

年 度	入 館 者	貸出冊数
昭 37	24,209人	11,165冊
38	28,661	16,601
39	25,369	14,007
40	33,447	14,422
41	41,924	20,427
42	36,481	16,033
43	57,287	16,326
44	87,290	29,551
45	87,283	30,671
46	74,629	25,954
47	77,715	25,088
48	76,682	24,924
49	73,881	24,540

学生の声

卒業論文と図書館チャイム

昭和49年度
文学部卒業生 大関 真智子

秋風が立ち、紅葉もはじまる頃、図書館では卒業論文に取り組む四年生の姿があちこちに見られるようになりました。最後の学生生活を謳歌していた私も、早々と訪れた初雪にせかされて、5時半の閉館時間まで図書館で過す事が多くなっていきました。「もっと早くから始めていけば・・・」という先輩達の言葉を繰返すまいと心に決めていたのですが、結局は、差し迫ってから混乱した頭をかかえ込む事になってしまいました。

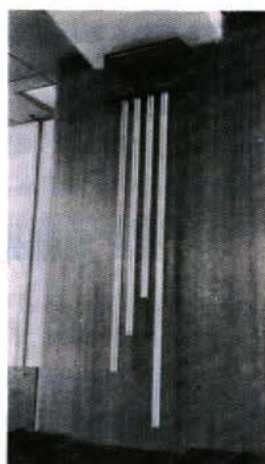
そんな時、こうこうと明りのついた図書館に、友の黙々と分厚い辞書を引く姿や原書の文献を読む姿、又、手を休めて思案顔の友を見つけて随分勇気づけられたものです。初冬の冷たい外の空気とは反対に私共の囲りは熱っぽく、顔まで紅潮させていたにちがいありません。次第に暮れてゆく空に葉を落して寒々とした木やキノルド館の尖塔が影絵のように浮び、消えてゆくのをぼんやりと眺めていたこともありました。

時がたつのを忘れていた私共にとって全く突然に鳴り出す閉館ベルの音に、私共は現実引き戻されて、いつも、特に筆がすすまなかった時など、図書館から追い立てられているような感じでした。いやでも提出日までの日数を数えてしまい、絶望感に襲われたりしましたが、それまでになく学生生活の充実感を味わったのもこの時だったような気がします。

あの緊張の日々を思い返しながら卒業を迎えた今、同じような思いをするであろう後輩達にささやかながら贈りたいと思うのは、あのショッキングな音をだす閉館ベルの替りのチャイム

です。

穏やかなチャイムの音がこれから図書館を御利用になる皆様の疲れを少しでも癒してくれるよう文学部卒業生一同願っております。



写真は新設されたチャイム、毎日閉館時にウェストミンスター・スタイルの美しい音色を響かせます。

小さな図書館

藤女子短期大学
保育科2年

岩間 千代

知りたがり屋の病いがこうじて、二人の子ともがいながら、またしても学生となった。

本来ならば、おいしい味噌汁づくりに精を出し、庭の草むしりに1日を過ごす主婦であるはずなのだが、「どうして、この味噌はおいしいのだろう」とか「最近の味噌はなぜ味が生えないのだろう」と考える病いが頭をもたげてしまうのだ。だから「味噌、味噌、味噌」と口でとなえて本屋をあさる。あさって、掻き集めた本が本棚をうめつくしてしまった。本屋になれば図書館に行く。二人の子どもは児童図書室が受持ってくれるから一石二鳥と通っているうちに、我家の子どもの本棚の隅に、いつのまにか一冊の小さな「本かしだしノート」というものが、ぶら下がるようになっていた。ページをめくると〇〇幼稚園5才〇〇とか、小学二年〇〇とかいう名前が、幼いが生々とした文字で書かれている。注意して本を貸出すようすを見ている

と、遊びに来た友人に、まず本の好みを聞き出し、一緒になって捜したり、自分の感動した本をすすめたりしている。幼児が来ると、ちょっと前の自分の経験をいかし、年令にあった本を選んでやったり、読んで聞かせてやるなどして、小さな我家の司書は張り切っている。しかも、私が図書館の本捜しに夢中になっている間、退屈まぎれにカウンターの中を背伸びしてのぞきこんでいたのだろう。借りられた本には返本日のしおりまで挿まれて手渡される。その満足げな顔は紅潮し、口も目もゆるみ、声も一声高く聞える。きっと、人の役に立っているという誇りと喜びなのだろう。

なまけものの私は、図書館の雰囲気ばかりで机に向かうことを学生時代におぼえた。それが功を奏してか、活字とは縁遠い主婦となっても図書館を忘れなかった。おかげで、またこうして学生になれる足がかりになったし、我家にも子ども図書室ができ、この子たちは、図書館を身近においてくれそうだ。

宇野文庫について

皆さんには目録カードを見ていて「宇野文庫」という表示に気付いたり、係員に宇野文庫の本ですと言われた経験があると思います。この「宇野文庫」とは本学教授であられた故宇野親美先生（国文学、1968年没）の旧蔵書約3,000冊をご遺族の方から寄贈を受け、先生を記念する文庫としているものです。内容の大半は国文学関係ですが、それも古代から現代にまで涉っていて、先生のご造詣の深さと広さが伺えます。この文庫に収められている図書は文庫の性格上残念ながら貸出はしていませんが、閲覧室では利用できます。

なお宇野先生については本学国文学雑誌5・6合併号が追悼特集号となっていますので、それをご覧ください。

読書について

田 中 興 子（奉仕部主任）

私は以前、自分の想像、空想あるいは感傷を満たすのが読書だと割り切っていました。

したがって読物も外国の小説類が多く、内容も現実の自分の生活からかけ離れた未知の世界、想像の世界が描かれ、筋の組立ても起伏に富むものに興味を抱いていました。

しかし何時の頃からか自分でも気付かないうちに日記、紀行、随想等のような著者自身の思想や体験の軌跡を語る図書に興味を持ち出しました。

淡々と、時には激しく語られる著者自身の日常の生活の中に私自身も入って行ける共通の場を持つものがあつた時、読書をする喜びを感じます。

最近読んだものの中に森有正の「バビロンの流れのほとりにて」というのがありますが、そ

の内容はフランス在住の著者が周辺の文明とそれを育んだ自然に直接触れながら折々の内面の思索の流れを親しい友人への手紙を通じて綴ったもので、ヨーロッパ文明の本質に迫ろうとする一哲学者の苦悩と孤独な歩みの跡が克明に示るされております。

各地の遍歴を通じて著者自身の経験と時の流れが著者の内面に新しい流れをかたちづくっていきます。

ここでいう著者の経験とは体験ではありません。凡ての空想や感傷を洗い去った各人の日常の現実そのものが経験であり、そのような自己を踏まえたうえで文明に接した時、自然と渾然一体となったあるがままの姿が見えそのまま受け入れることが出来ると語っております。

哲学者が生涯求め続ける思想を把握することは到底出来そうもありませんが、これらの思索がある瞬間著者自身の現実の姿を伝える時驚きにも近い感動と親しみを覚えました。

NEWS

キャレル利用時間変更

書庫内に入って図書や雑誌を自由に検索したり、落ち着いた雰囲気での学習や研究のためにキャレルを提供し利用の便を図ってきましたが、本年度より下記のとおり利用時間が変更になりました。

9:00—16:00 → 9:00—閉館時

詳しいことは係員にお尋ねください。

図書館委員会（昭和49年度）

- 5月2日 規定の語句修正・図書予算案、他
- 6月10日 予算の説明、他
- 7月8日 夏期休館日決定・北海道地区大学図書館職員研究集会、他
- 9月9日 試験前の図書館奉仕業務、他
- 10月14日 新館長紹介・大学祭中の図書館業務、他
- 11月7日 図書館報・宇野文庫について、他
- 11月11日 冬期休館・図書館だより・宇野文庫の扱い、他
- 2月19日 50年度の図書館予算・キャレルの利用時間・指定図書、新刊雑誌の貸出し、他
- 3月22日 チャイムの寄贈、他

研修会参加（昭和49年度）

- 5月16—17日 第1回古文書解説講座（大麻公民館）
- 5月23—24日 第25回北日本図書館大会・北海道図書館大会（江別市民会館・道立図書館）
- 7月17—24日 私立短大図書館担当者研修会（熊本）
- 8月8日 北海道地区大学図書館職員研究集会（本学図書館）
- 8月28—31日 大学図書館司書研修会（東京）
- 9月6日 第24回北海道地区大学図書館協議会総会（北海学園大学附属図書館）
- 9月9—14日 第20回近世史料取扱講習会（仙台）
- 9月26—27日 第2回古文書解説講座（丸瀬布）
- 12月2—7日 第3回漢籍担当職員講習会（東京）
- 3月20日 第5回整理技術全国会議（東京）

。編集後記。

札幌の一番うつくしい6月です。そして今年、藤の花の美事なこの学苑の創立50年にもあたっております。大学は、学苑の中で、最も若いのですが、それでも、もう15才になります。——十有五而志于学——論語に所謂、志学の年です。この意義ある年に「図書館だより」は出版することができました。創刊のきっかけをつ

くられ、終始、お励まし、ご指導くださいました伊藤館長先生はじめ図書館委員の諸先生に、あつくお礼申しあげます。

これから、この「たより」は、どのように成長していくでしょうか。利用される皆さんも、どうぞご声援ください。次号は、もっとよいものをと、館員一同意気こんでいます。ご期待ください。

藤女子大学図書館だより 第1号 1975. 6. 5 発行

発行者 札幌市北区北16条西2丁目 藤女子大学図書館

印刷者 札幌市東区北12条東3丁目 天使院印刷製本部